

III-192 等方硬化弾塑性モデルに関する研究

大阪市立大学工学部 正員 望月 秋利
 （株）日本地殻調査 正員 蔡 敏
 （株）大林組技術研究所 正員 高橋 真一

1. はじめに

弾塑性論を土の挙動解析に始めて適用したDruckerは、土の応力・変形特性を検討し、土の構成式には静水圧軸に交わらない負荷曲面と交わる負荷曲面の二つが必要であることを示した。またPoorooshasbは砂に対して応力経路の異なる試験結果より、塑性ポテンシャルの存在と非関連流動則の必要性を示した。これらの考え方を合わせると、土の弾塑性挙動を表現するためには「非関連流動則を適用した二重負荷曲面を持つモデル」が必要となる。この結論は、筆者らの構成式に関する基本視点の1つで、この考え方にもとづいて砂の構成モデルを検討した。

2. 弾塑性モデルに関する考察

表-1は二重負荷曲面を持つモデルに関する構成成分とそれらに対する必要な条件を示す。すなわち「非関連流動則を適用した二重負荷曲面を持つモデル」の考え方に従う限り、表に示す各条件が必要になる。表中には、筆者らのモデル¹⁾とLadeモデル²⁾を対応させて示した。いずれも全条件を満たし、モデルとしての基本形を構成している。以下に筆者らのモデルの特徴を成す破壊基準と硬化パラメータについて示す。

2.1 破壊基準 f_{sf}

「破壊基準が応力状態によって決まる」という考え方から、まず破壊基準の形を推定し、異なる応力経路の試験結果で検証する。 f_{sf} は一般的に応力状態 σ_{ij} により決まり、等方硬化の場合応力の不変量 I_1 、 I_2 、 I_3 により決まると考えられる。さらに砂材料を摩擦材料と仮定するので、 f_{sf} は無次元の関数であるべきことと I_1 、 I_2 、 I_3 を均等に考慮すべきことから「 $I_1 \cdot I_2 / I_3$ 」が基本的な構成部分と考えた¹⁾。この項($I_1 \cdot I_2 / I_3$)は松岡・中井ら³⁾がSMPの概念から導いた破壊基準と一致している。図-1は横軸を($I_1 \cdot I_2 / I_3 - 9$)、縦軸を I_1 として、三軸圧縮試験と平面ひずみ試験の破壊時の結果をプロットしたものである。おおむね全試験結果が一本の線で表されるので、結局破壊基準は次式で表すことができる。

$$f_{sf} = (I_1 \cdot I_2 / I_3 - 9) \cdot I_1^m - \eta_I = 0 \quad (1)$$

2.2 硬化パラメータ

硬化パラメータはその物理的な意味を考えて、塑性仕事(W^p_s)にとることが多い。

$$W^p_s = \int (\sigma_{ij} d\epsilon^p_{ij}) \quad (2)$$

図-2は σ_m 一定・平面ひずみ試験の $f_s \sim W^p_s$ 関係を示しているところ、 $f_s \sim W^p_s$ 関係が一本の線にならないので、塑性仕事 W^p_s を硬化パラメータとして用いることは適切でない。図-2の $f_s \sim W^p_s$ 関係は応力が大きい程同じ f_s に対して W^p_s が大きくなっている点に注目し、 W^p_s を σ_{kk}^t で除して、次式に示す H^p_s を新しい硬化パラメータとした¹⁾。

$$H^p_s = \int (\sigma_{ij} d\epsilon^p_{ij}) / \sigma_{kk}^t \quad (3)$$

$t=1$ の場合、諸戸⁴⁾の提案した「応力経路によらず応力比と唯一の関係を持つパラメータ」と同じ形になる。図-3は $f_s \sim H^p_s$ の関係を示し、ほぼ唯一の関係となっている。

3. まとめ

2つの構成モデルに対し、二重負荷曲面を持つ弾塑性モデルの必要な条件を満足していることを検討するとともに、筆者らのモデルの特徴を示した。表-1は二重負荷曲面を持つ弾塑性モデルの必要な条件を網羅したもので、弾塑性モデルを検証するための一種の“物差し”となりえると考えている。

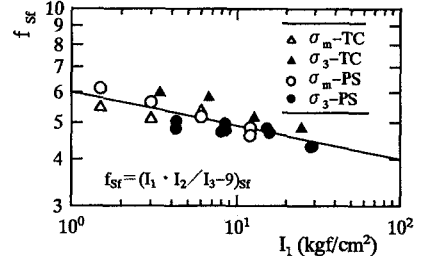


図-1 ($I_1 \cdot I_2 / I_3 - 9$) f_{sf} 関係

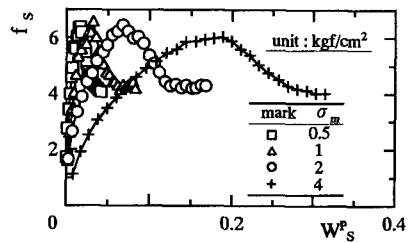


図-2 $f_s \sim W^p_s$ 関係

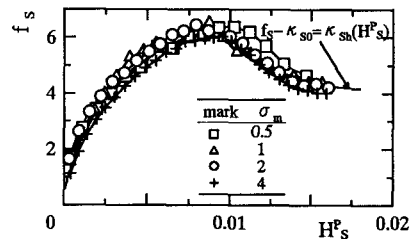


図-3 $f_s \sim H^p_s$ 関係

表-1 二重負荷モデルの構成と必要条件

項 目	弾塑性理論の必要条件 (二重負荷曲面を持つ弾塑性モデル)	L a d e モデル ²⁾	著者らのモデル ¹⁾
弾性特性	弾性定数 (E, ν) Hooke則が成立し、ひずみエネルギーが変位の関数として正值とすれば、 ① $-1 \leq \nu \leq 0.5$ ② $E \geq 0$	$\nu = \text{定数}$ $E = K_{ur} \cdot \sigma_m^n$	$\nu = \nu_0 \cdot [1 - \sigma_m / (D + \sigma_m)]$ $E = E_0 \cdot \sigma_m^n$
弾性特性	負荷関数 (f_c) ① f_c は応力空間に置いて凸な関数。 ② f_c は静水圧軸に対して直交。	$f_c = I_1^2 - 2 \cdot I_2$ $= \sigma_1^2 + \sigma_2^2 + \sigma_3^2$	$f_c = I_1^2 - 2 \cdot I_2$ $= \sigma_1^2 + \sigma_2^2 + \sigma_3^2$
弾性特性	破壊基準 ① 塑性圧縮では破壊せず。	—————	—————
塑性圧縮特性	硬化則 (F_c) ① 等方硬化材料の一般硬化則： $F_c = f_c(I_1, I_2, I_3) - \kappa_{co}$ $- \kappa_{ch}(H^p_c) = 0$ ② f_c が一定値を保つ場合、 $dH^p_c = 0$ 。 ③ f_c と H^p_c に唯一関係の存在。	$F_c = c_c \cdot p_a \cdot (f_c / p_a^2)^p - W^p_c$	$F_c = f_c - (H^p_c / a)^{1/b}$
塑性圧縮特性	硬化 $\dot{H}^p_c$ ① H^p_c は単調増加量。	$dW^p_c = \sigma_{1j} d\epsilon^c_{1j}$	$dW^p_c = \sigma_{1j} d\epsilon^c_{1j}$
塑性圧縮特性	塑性 $\dot{\epsilon}^c_{1j}$ (g_c) ① $d\epsilon^c_{1j}$ は塑性 $\dot{\epsilon}^c_{1j}$ に直交。 $d\epsilon^c_{1j} = d\lambda \cdot (\partial g_c / \partial \sigma_{1j})$ 関連流動則 $\rightarrow g_c = f_c$ ；非関連流動則 $: g_c \neq f_c$ ② 塑性仕事は正值 ($dW^p_c \geq 0$)	$f_c = g_c$	$f_c = g_c$
せん断塑性特性	負荷関数 (f_s) ① f_s は応力空間において凸な関数。 ② f_s は静水圧軸に交差せず。	$f_s = (I_1^3 / I_3 - 27) \cdot (I_1 / p_a)^m$	$f_s = (I_1 \cdot I_2 / I_3 - 9) \cdot I_1^m$
せん断塑性特性	破壊基準 (f_{st}) ① 塑性状態から破壊状態への連続的推移。 ② 破壊基準は静水圧軸に交差せず。	$f_{st} = (I_1^3 / I_3 - 27) \cdot (I_1 / p_a)^m = \text{定数}$	$f_{st} = (I_1 \cdot I_2 / I_3 - 9) \cdot I_1^m = \text{定数}$
せん断塑性特性	硬化則 (F_s) ① 等方硬化材料の一般硬化則： $F_s = f_s(I_1, I_2, I_3) - \kappa_{s0}$ $- \kappa_{sh}(H^p_s) = 0$ ② f_s が一定値を保つ場合、 $dH^p_s = 0$ 。 ③ f_s と H^p_s に唯一関係の存在。	$F_s = f_s - a \cdot e^{-b \cdot W^p_s} \cdot (W^p_s / p_a)^{1/q}$ $q = \alpha + \beta \cdot \sigma_3 / p_a$ $a = \eta_1 \cdot (e \cdot p_a / W^p_{speak})^{1/q}$ $b = 1 / (q \cdot W^p_{speak})$ $W^p_{speak} = C_s \cdot p_a \cdot (\sigma_3 / p_a)^L$	$F_s = f_s - (\kappa_{s0} + \kappa_{sh})$ $= f_s - \kappa_{s0} - \kappa_1 \cdot \kappa_2$ $\kappa_1 = H^p_s / (\alpha + \beta \cdot H^p_s)$ $\kappa_2 = 1 - \zeta \cdot \exp[-(\xi \cdot H^p_s)^\gamma]$ $\kappa_{s0}, \kappa_{st}, \alpha, \beta = \text{定数}$
せん断塑性特性	硬化 $\dot{H}^p_s$ ① H^p_s は単調増加量。	$dW^p_s = \sigma_{1j} d\epsilon^s_{1j}$	$dH^p_s = (\sigma_{1j} d\epsilon^s_{1j}) / \sigma_{kk}^t = dW^p_s / \sigma_{kk}^t$
せん断塑性特性	塑性 $\dot{\epsilon}^s_{1j}$ (g_s) ① $d\epsilon^s_{1j}$ は塑性 $\dot{\epsilon}^s_{1j}$ に直交。 $d\epsilon^s_{1j} = d\lambda \cdot (\partial g_s / \partial \sigma_{1j})$ 関連流動則 $\rightarrow g_s = f_s$ ；非関連流動則 $\rightarrow g_s \neq f_s$ ② 塑性仕事は正值 ($dW^p_s \geq 0$)	非関連流動則を適用。 $g_s = I_1^3 - \{27 + \eta_2 \cdot (p_a / I_1)^m\} \cdot I_3$ $\eta_2 = s \cdot f_{st} + r \cdot (\sigma_3 / p_a)^{1/2} + t$	非関連流動則を適用。 $g_s = I_1 \cdot I_2 - [9 + \omega \cdot I_1^{-m}] \cdot I_3$ $\omega = \chi \cdot f_s = \chi \cdot (\kappa_{s0} + \kappa_{sh})$

参考文献 1) 蔡 敏・望月秋利・高橋真一：砂の σ_m 一定・平面ひずみ試験と二重負荷曲面を持つ構成式の検討，土木学会論文集，No. 487，Ⅲ-26，pp.197-206，1994。

2) Lade, P.V. and Oner, M.: Elasto-Plastic Stress-Strain Model, Parameter Evaluation, and Predictions for Dense Sand, Constitutive Relations for Soils, Results of the International Workshop on Constitutive Relations for Soils, Edited by Gudehus, G., Dayer, F. and Vardoulakis, I., Balkema, Netherlands, pp.159-174, 1984.

3) Matsuoka, H. and Nakai, T.: Stress-Strain Relationship of Soil Based on the SMP, Constitutive Equations of Soils, 9th ICSMFE, Speciality Session. 9, pp.153-162, 1977.

4) Moroto, N.: A New Parameter to Measure Degree of Shear Deformation of Granular Material in Triaxial Compression Tests, Jour. of JSCE, Soils and Foundations, Vol.16, No.4, pp.1-9, 1976.